

(満足感、充実感のために)	・教師との共感	・成功に導ける教材
・目標にふさわしい題材、教材である	・客観的な評価	・有能感を感じさせる
・のりこえられる抵抗がある	・役に立つ	・使える
		・ほめる

(4) 一人ひとりのめざす像へのアプローチ

小学部の児童の中から数人を選びだし、個人のめざす像に向かってアプローチしていった実践をまとめた。(個人事例、P35～P47参照) (小坂)

【3】 児童の実態

(1) 児童の実態

小学部の児童は、表2のような学年でクラス編成している。また、表3のような主障害を持った児童により構成されている。

表-2 学年別実態

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
人数	1人	2人	4人	3人	3人	3人	16人
学級	1組		2組		3組		3

表-3 障害別実態

	ダウン症	染色体異常	てんかん	脳腫瘍後遺症	自閉的傾向	もやもや病	水頭症	精神発達遅滞
人数	5	1	3	1	1	1	1	3

(2) 発達検査による実態

児童の実態を遠城寺式乳幼児発達検査でみると下図のようになる。大体2歳～4歳半の発達を示している児童が多い。個人内差を見ると、運動や生活習慣は全体的に高い数値を示している(生活年齢効果の表われ)が、言語に関しては落ち込んでいる児童が多い。

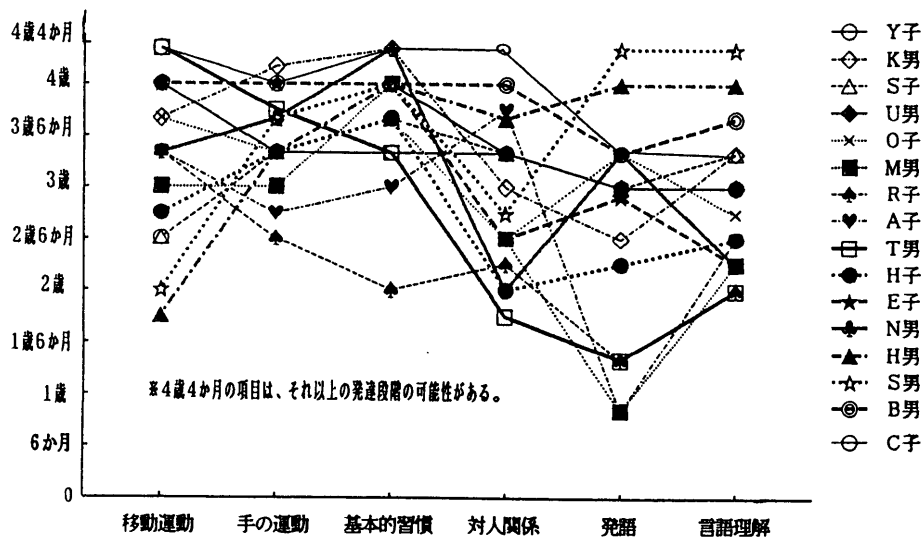


図-1 遠城寺式乳幼児発達検査

(3) 自分づくりの段階

新版K式発達検査を3名の個人事例対象児に実施し、自分づくりの段階はどのあたりかを考えた。他の児童については観察を基に組み込んでいったのが表4の「自分づくりの段階表」である。表作成により見えてきた児童の実態は次のようである。

自我の充実の時期から自制心の芽生えに移るまでに壁があり、この段階（3歳前半の自我と自己主張の矛盾拡大の時期）に停まっている児童が多い。

自制心の芽生えや形成の時期にある児童の中にも、3歳前半以下の段階の特徴を残している児童がほとんどである。発達検査では認知面や言語面のとりこぼしにあらわれている。

(4) 生活を楽しむ姿

児童の実態を、生活を楽しんでいるかどうかという点から見ると、次のような姿があげられる。

- ・自分一人のできる、慣れたことなら楽しめる。
- ・自信のあることなら楽しめる。
- ・短い時間なら楽しめる。
- ・特定の人となら、一緒に楽しむことができる。
- ・今楽しいこと、今興味が注がれること、今したいこと等、今の楽しみを求めている。
- ・発展性はないが、特定のことなら楽しめる。
- ・楽しめそうな見通しや道筋を示してもらおうと活動できる。

(5) 楽しめていない実態

小学部の児童の楽しめていない実態を基に、田中昌人氏、白石正久氏の研究資料を参考にしながらまとめていったのが次の表である。障害を持った子には、一般的な発達や、普通に葛藤を乗り越え育っていく心の成長の道筋ではとらえきれない難しさがある。これを白石氏は「発達障害という困難さ」という視点でとらえようとしている。また、ダウン症や、自閉的傾向の特徴についても考えていくことにした。

表-4 自分づくりの段階表

年齢	自分づくりの段階		児童		
			1組	2組	3組
5歳後半	自己客観視の芽生え	自分づくりの始まり			
4歳後半	自制心の形成				C子
4歳前半～3歳後半	自制心の芽生え	自我をコントロールでききるもう一人の自分		A子	B男 S男
3歳前半	自我と自己主張の矛盾拡大	もう一人の自分のできはじめ	K男 S子	U男 O子	H男 E子 N男
2歳後半	自我の充実			M男	
2歳前半	自我の拡大		Y子	H子 R子	
1歳後半	自我の誕生	感情・意欲の育ち		T男	

楽しめていない実態（小学部教師による観察）	発達障害という困難さ（白石氏）
<ul style="list-style-type: none"> ・人に興味を示さない。 ・他の人のことが気になり、自分で判断できない。 	人を求めて助けを求めて、葛藤を乗り越えていこうとする力の弱さ。
<ul style="list-style-type: none"> ・関わりたいという気持ちの表れの誤学習、ちょっかいをだし、ふざけて遊ぶ。 	共感を求め、それに応じてもらい励まされて自信を持つ力の弱さ。
<ul style="list-style-type: none"> ・多動でじっとできないため、深く楽しむまでに興味に移る。 ・目の前のことが気になり、注意散漫。 ・興味関心が多方面に分散する。 	じっくり間を取って考えたり、取り組んだりする力の弱さ。
<ul style="list-style-type: none"> ・自己中心性、待てない、自我の強さ。 ・自己中心的で、先生を相手にしてなら遊べるが友だちとは遊べない。 ・自分の見いだした楽しみが反社会的であったりするために周囲の人から止められる。 	相手の意図と、自分の意図を調整することの難しさ。
<ul style="list-style-type: none"> ・失敗にぶつかったらなかなか立ち直れない。 	苦手意識を持ってしまっている難しさ。
<ul style="list-style-type: none"> ・自制心がついていないため、自分の楽しみの追求と現実の世界とのギャップについていけない。 ・同一の遊びばかり没頭し、発展性がない。 ・勝敗がわからず、ゲームの楽しさやルールが理解できない。 	イメージや経験の拡がりにくい難しさ。

発達障害という困難さの他に、特定の障害について次のように考えていきたい。

自閉症	楽しさや意味を共有して活動することがなかなか難しい。
ダウン症	自分で考え、見通しを持って取り組むことがなかなか難しい。

(6) 小学部の実態からの考察

- ・発達の壁や、発達障害という困難さを考慮しながら、今楽しめていること、できることを大切に、指導にあたりたい。
- ・さまざまな段階、課題、障害を持つ16人の子どもたちが、合同で学習していく困難さが見えてきた。一人ひとりの実態を考慮しながら、今後一層クラス単位の学習、グループ学習、個に応じた学習のあり方を求めていきたい。
- ・授業づくりにおいて、以上の実態を考慮した、題材選定や支援のあり方を求めていかなければならない。

（岡村）